

に、これらの変化は、個体差や、さらにまた、地方差というべきものもあらわしている。しかも、それが、かなり著しい程度の差違を示すので、各別の種類が、そこに、存在するかのよう考えられがちである。しかしながら、それは、全体としては、むしろ、連続的な変異を示していて、その間に、種類をちがえるほどの、大きな間隙があるとは思われない。その変化の中に、多少の断続するところが見られるにしても、それは、種内の地方差によるものと解して事足りる。また、実際、葉のひろさ、鋸歯の大きさ、毛の多少、果実の大小などの変異は、この属では、種的特徴にとりがたい場合があり、サハアデサキなどが、その好例を示すのは、周知のことに属するが、この海南のアデサキそれ自身の変異も、またそれに劣らず、よく、これを示しているように思われる。要するに、ヤクシマアデサキ以下の諸種は、各別の種類というべきものではなくて、それは、楊子江流域の、江西、安徽、浙江から、台湾北部、薩南諸島にかけて、ひろく分布するところの、ただ一箇の種にすぎないと考えられる。そして、その中に、多少、地方的変形が見られるのは、上にも述べた通りで、それらの相互関係は、台湾のは、支那のに近く、また、薩南諸島のは、それらから、やや隔つているように見うけられる。さて、種名は、*Hydrangia angustipetala* Hayata in Journ. Coll. Sci. Imp. Univ. Tokyo, 30-1: 107 (June 1911)-Icon. Pl. Formos. 1, pl. 32 (Sept. 1911)-ibid. 2: 4 (1912) (Formosa, Giran Chiurei) が最も古く、*H. umbellata* Rehd. et Wils. in Sarg. pl. Wils. 1-1: 25 (July 1911) (China, Kiangsi Kuling); *H. Kawagoeana* Koidz. in Bot. Mag. Tokyo, 32: 138 (1918) (Ins. Tokara); *H. yakuiensis* Sugimoto in Nippon Journ. Bot., 1-1: 19 (1926); *H. gross-serrata* Engl. in Engl. et Prantl, Pfl. fam., ed. 2, 18a: 203 (1933) (Ins. Yakushima); *H. Kawagoeana* var. *grosseserrata* Hatusima in Journ. Jap. Bot. 26: 372 (1951) などは、その異名になる。 (資源科学研究所)

オリー氏のヒノキ科の分類に關聯して *Sabina* 屬を論ず (草下正夫) Masao

KUSAKA: On the genus *Sabina*, relating with Li's classification of Cupressaceae.

アーノルドの雑誌にのつた Li 氏のショウナンボク属の分類及びヒノキ科の各属の類縁についての論文は大へん興味をもつて読んだ。中国のこうした人等が困難な時代を通じてタクソノミーに精進されるのは全く尊敬に値することである。(Li 氏以外では例へば H. Keng 氏の Quartely Journal of the Taiwan Museum 6(1): 81, 1953 にのつたサッサフラスの分類等タクソノミカルに割切つたものが多い。) しかし Li 氏のヒノキ科の分類でちよつと筆者に納得のいかない点がある。それは *Sabina* (*Juniperus*, sect. *Sabina*) 属について何等言及していないことである。同氏は Pl. I 及び Pl. II に示されたヒノキ科諸属の毬果構造の模式図にあきらかな如く、毬果の鱗片の排列及び

胚珠の着生位置によつて系列をきめているのに拘らず *Sabina* を分割することなく Pl. II. (p. 36) の *Juniperus* の模式図は唯 1 個で表現され、あきらかに *Juniperus*, Sect. *Oxycedrus* のものであり、*Sabina* の辺鱗もない。*Sabina* (ビャクシン属) の毬果は今さらいうまでもなく、十字対生する心皮に各2個宛の上向する胚珠をもち、ネズコ属、等に極めて近く、*Juniperus* (=Sect. *Oxycedrus*) ネズミサシ属の三枚の鱗片(これ

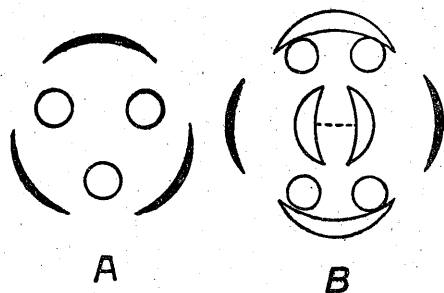


Fig. 1. Flower diagrams of *Juniperus* (A) & *Sabina* (B)

Black crescents mean bracts, white ones carpels, and white rings ovules.

は心皮ではない。何故なら胚珠と交互に排列するから。心皮は退化したか或いはイチキ科の種衣の様に花期にはみとめがたく後に多少の発達を見るが外側の鱗片と癒合して組織として区別出来にくくなるものかと思う。種子の外殻が心皮の後身だとは考えにくい。)にかこまれて枝端頂生する3個の胚珠をもつものとは Li 氏の分類方式によれば全く異なるもので、従来、*Sabina* と *Juniperus* が同一属とされているのは単に両者が最後に至つて石果様の閉鎖

鎖毬果をつくるという点にのみとらわれたもので、極めて皮相の見解といわねばなるまい。材の解剖学的性質が殆んどまつたく近似するのはカリトリス属の一群をのぞくヒノキ科諸属全般のことで問題にならない。又、ヒノキ科では対生葉序と三枚輪生とは初生葉では甚だ移行しやすいもので毬果の二数、三数の差は属をわかつにも足りない、又ネズミサシ属のものは、ビャクシン属の頂端のやや退化し2個癒合した心皮が更に退化してなくなり胚珠が頂生したものだとする見解も一応考えて見たが前者はともかくとして後者はかなり行き過ぎの議論の様に思われる。というのは退化ということには人間の想像が大きなパートを占めるからである。且又 Li 氏の方法は根本的にくずれることになる。

筆者は Li 氏がヒノキ科諸属の類縁をきめた考え方には賛成なので *Sabina* をネズコ族 (*Thujoideae**) の *Biota* (コノデガシワ属) 又は *Heyderia* の先に加えれば大体満足が行くのである。ともかく、Antoine (1754) 以後長い間誰も *Sabina* を採用しなかつたし、現在も日本では、中井、宮部、館脇三氏がとりあげた位で、欧米の諸学者が *Juniperus* に合一してかたづけけているのは全く私には理解出来ない。おしばという便利だが困つた標本製作方の故かと思われる節がある。というのは *Juniperus* もしくは *Sabina* の記載を見ると大抵毬果は円くて種子は2個と云つた様なことしかなく花の記載をともなつた原記載は極めて少ない。つまり潰れた毬果からはなにもわからぬし、雌花は乾くと見つからなくなる。それと歐洲では *Sabina* が昔は手に入りにくかつたもの

と思う。イブキがリンネ氏が世當時行つていたが雄ばかりだつたらしい。その結果、*Sabina* をも含めて *Juniperoideae* として一括し、更に科まで昇格させるという結果を招来したとすれば功罪いつれか。ただここに一言お断りしなければならぬのは *Sabinella* 属で、これは私は今のところ *Juniperus* の亜属と考えているが、資料不十分で将来の問題としたい。

(林業試験場浅川支場)

The writer read with great interest H. L. Li's work on the *Libocedrus* and the classification of Cupressaceae published in Journal of Arnold Arboretum 34:17-36 (1953). But the writer doubted why he did not taken up the genus *Sabina* separating from *Juniperus* in spite of his principle of classification based on the structure of the cone, although clearly showing his diagrams in Pl. I. and II.

It is not necessary to explane long on the difference between *Juniperus* (Sect. *Oxycedrus*) and *Sabina*. The female flower of *Juniperus* has three terminal ovules covered by three bracts, and these three bracts become juicy tissue when they ripe, and Li's diagram exactly shows it. On the other hand, the female flower of *Sabina* has two or three pairs of opposite carpel, one pair on the top is united and has no ovule, and the next pair or rarely 2 pairs of carpel have two ovules each on inner side. Hence its structure is more similar to *Thuja* (in the sense of Li) than *Juniperus* except it becomes a drupelike cone. Besides, other features of *Sabina* with no septum at the base of spinly leaves and with scale-like foliage, in this case, may be useful to support the view that *Sabina* is a valid genus and is rather nearer to *Thujoideae** than *Juniperideae*.

The writer can not understand why may systematic botanists since Antoine (1754) have not recognized the genus *Sabina*, although in Japan Dr. Nakai (1), Dr. Miyabe and Dr. Tatewaki (2), and the writer (3), adopted this genus.

* *Thujoideae*, in the mean of excluding the genus *Thujopsis* from *Thujopsidae* Endl. by Li.

1. Nakai: Tyosen-sanrin-kaiho No. 163, p. 27 (1938).

2. Miyabe & Tatewaki: Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. 15:128 (1938).

* Li 氏は *Thujopsidae*, Endl. を用いて居り、私の *Thujoideae* はそれから *Thujopsis* を除いたものをいう。

3. Iwata & Kusaka: *Coniferae Japonicae Illustratae*, (see fig. 74 et 81) p. 196 (1952).
4. Kusaka: *Transactions of the 62nd Meeting of Japanese Forestry Society*. p: 1-2. fig. 2 (1953).

□Léon Croizat: *Manual of phytogeography* (pp. 690, pl. map. 105. Junk 発行 the Hague 1952)

An account of plant dispersal throughout the world という副題がある。この書は世界的規模における植物分布の道すじを主題にした論文ともいべき性質のものである。即ち顕花植物が出現した場所にはふれないが、現在の顕花植物の直接の祖先 (modern angiospermy) はジュラ紀末から白堊紀の初頭に3つの門 (gate of angiospermy) から分布をはじめた。アフリカ南部、西ポリネシア、マジェラニアがこれで、第1が特に重要な役目を演じた。これから発した architype の流れは地球上に一定の道 (truck) を劃している。この道をとる genorheitra の流れは偶発的な陸橋などによるものではなくて、秩序的、反覆的になされたが、この書では事実をのべるだけで解釈は下されていない。流れ更に第二次の分化の中心を各地域に作り、そこから現在の分布地に達した。第2の分化期は白堊紀末から第三紀の初頭の地球表面変動期である。氏は holoarctic 分布の存在は神話であるとし、すべてを南方起源に帰している。老大なデータと文献をあつかつていて、教えられることが多いが、なおデータの不足と取扱い方のあらつばさはまぬかれない。氏はハーバード大学からヴェネズエラのカラカス博物館に転じ、アンデスの麓、オリノコ河畔を逍遙しつつ、第2著動物分布論の稿を進めている由。(津山 尙)

正 誤 表 Errata for J.J.B. 29 nos. 1, 2 & 3

No.	頁 (page) 一行 (line)	誤 (for)	正 (read)
1	11— 6 \	of	delete "of", of をとる
	20 欄外 (foot note)	aud	and
	26— 9	3	2
	27— 5	tne	the
	//—35	auther	author
	28—15	もの言われる	ものと言われる
	32—21	本年	昨年
2	48—22	一昨夏	昨夏
3	93—lowest	下記を加える	add," Sept. 1950—Typus in Herb. Agr. Coll. Matsuyama)